

## 主 題：私たちは主を宣べ伝える

## 聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章18節

パウロは自分自身に与えられた務めを知っていました。17節で見たように「キリストが私をお遣わしになったのは、バプテスマを授けさせるためではなく、福音を宣べ伝えさせるためです。」、私はこのすばらしい神の福音を伝えるために神から召されたのだと、その確信をもってパウロは行ったのです。そして、彼はこの働きを忠実に行いました。福音宣教という働きを考えるなら、それは宣教師、牧師・教師だけの働きではなく、イエスを信じたすべてのクリスチャンに例外なく与えられた務めであると、私たちは知っています。「語らなければいけない」のではなく、人々にこのすばらしい救い主を「語りたい！」と、その思いをもって私たちはイエス・キリストの救いを語るのです。

パウロはこの使命をいただき、そして、その使命を忠実に果たしたと前回見ました。実際にこのコリント教会における彼の働きについては、使徒の働き18章で教えていますが、神ご自身がパウロに対して「:10 わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから」と言われた。」とされています。「:11 そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。」（使徒18：10-11）と書かれています。もちろん、パウロはコリントだけでなく、どこに行っても神のことばを忠実に語り続けました。

## \*パウロの福音宣教の特徴

パウロの福音宣教という働きを聖書から見るときに、そこに四つの特徴を見ることができます。まさに、この四つの特徴は私たちにとっても非常に大きな模範であると言えます。

## 1. 福音のメッセージを正確に語り続けた

Ⅱコリント2：17に「私たちは、多くの人のように、神のことばに混ぜ物をして売るようなことはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語るのです。」とあります。気付いていただきたいのは、パウロが私は「神のことばに混ぜ物をして売るようなことはせず、」と言っていることです。そして、そのことばの前に「多くの人のように、」と書かれています。多くの人は神のことばに混ぜ物をして語っていたのです。そのような人たちがいた、でも、パウロは「私はそのようなことはしない」と言うのです。同じように、Ⅱコリント4：2には「恥ずべき隠された事を捨て、悪巧みに歩まず、神のことばを曲げず、真理を明らかにし、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。」とあります。

ですから、パウロの宣教を見るときに私たちがまず学ぶことは、自分勝手な考えや思いを加えず「神のことばを正確に伝え続けた」ことです。

## 2. 福音のすべてを語り続けた

みことばの一部ではなく、すべてを語ったのです。この部分を語ったら皆はどう思うか？とか、こんなことを語ったらだれかを傷つけてしまうのではないかと、そのような人間的な恐れをもって語ったのではなかった。神から託されたメッセージを正確に、しかも、すべてを語ったのです。コロサイ1：25に「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。」とある通りです。また、使徒20：27にも「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」と書かれています。

ですから、パウロは神のメッセージを正確に語り続けたのです。人間的な思いよりも託されたメッセージのすべてを語ることに専心していたのです。残念ながら、みことばのすべてを語らないで「語りたいところだけを語る」者たちが増えています。特に、「罪やさばき、地獄」については語りません。なぜなら、聞いている人たちの気分が減入るからと言います。でも、私たちひとり一人に託された務めは、みことばのすべてを語ることです。パウロはそのように歩んだ人物です。

## 3. 福音を神の力で語り続けた

Ⅱテモテ4：17には「しかし、主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。私は獅子の口から助け出されました。」とあり、パウロは神が与えてくれる力によって働きを為したと言えます。

## 4. 福音をいのちがけで語り続けた

使徒20：24「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」、主がこの使命を私に与えてくれた、福音を伝えるという使命をくださった、私はそのためにすべてを捨てて、たと

え、そのためにいのちを落とすことがあったとしても、それがみこころなら私は感謝すると言うのです。

まさに、パウロの働きはいのちがけでした。それほど彼は真剣にこの神からの務めを受け留めたのです。

こうして見るときに、これらの四つはどれも私たちが模範とするべき福音宣教の姿であると言えます。パウロはこの手紙の中で、福音宣教の働きにおいて人間的な知恵や、巧みなことばを用いるような人間的な小細工はいっさい要らないということを確認していました。ですから、そのようなことに心が向き始めて、そのように歩んでいたコリント教会の人たちに注意をして、そして、正しい道に戻るようにと勧めを為すのです。福音宣教に何もかも加えてはならないと。

確かに、私たちはこのすばらしいイエス・キリストの救いを愛する人たちに伝えたいと思って語りますが、伝えても伝えても心を開いてくれないということが余りにも長く続くと、私たちの中にはこのように考える人が出てくるかもしれません。「私の福音宣教には何か欠けているものがあるのではないか？本当に福音だけを語り続けていて良いのだろうか？彼らが信じるためには『福音+何か』が必要なのではないか？」と。このような思いを抱くことがあるかもしれません。注意しなければいけないことは、このような思いが私たちの心を支配すると、私たちは真理から離れてしまうということです。

もし、こうなってしまうなら、それは大変な悲劇です。そして、悲しいことに、これは今日の教会の問題でもあるということです。なんとか救いに与ってほしいと思う余りに、人間的ないろいろな知恵を働かせて、一人でも多くの罪人が救いに与るようにと願います。でも、私たちが考えなければいけないことは、神が為されるみわざに私たち人間の力が必要かどうか？です。確かに、私たちの愛する者に福音を語っても何の反応もない場合、もしかすると、あなたはそこで憤っているかもしれません。

預言者のことばを聞いてください。イザヤは栄光の主を見ました。大変な恐れを抱きました。そのときに主は彼の罪を赦してくださいました。そこで彼が耳にしたことは「:8 私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう」と言っておられる主の声を聞いたので、」でした（イザヤ書6：8-11）。その時にイザヤは「…ここに、私がおります。私を遣わしてください。」とそのように申し出るので。そうすると神は「行け」と言われます。「:9 すると仰せられた。「行って、この民に言え。…」と、ここまではすばらしいです。神が「だれを遣わそう」と言っておられるときに「私を遣わしてください」とイザヤは申し出るわけです。神は「行きなさい。語りなさい。」と言われますが、そこにある補足部分があります。それは「行って語りなさい。ただし、だれもあなたのメッセージを聞かないし、だれも悔い改めない。」という神のことばです。「…『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』」:10 この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのないように。」と神は言われたのです。イザヤはどんな思いをもってこのメッセージを聞いたでしょう。私たち人間は何かの希望を持ちたいです。希望が私たちの原動力になります。でも、最初から神は言われたのです。「だれもあなたのことばを聞かないし悔い改めない」と。「でも、行って語れ。」と言われます。イザヤは言います。「:11 私が「主よ、いつまでですか」と言うと、…」。

私たちもそのように問いたくなる時があります。「神さま、いつまでですか？いつになったらあなたは私の愛する者たちを救ってくださるのですか？」と。主がこのときに言われたことは「主のさばきが下る」ということです。そのときまで語り続けよ、と言われたのです。6：11-13「…主は仰せられた。「町々は荒れ果てて、住む者がなく、家々も人がいなくなり、土地も滅んで荒れ果て、:12 【主】が人を遠くに移し、国の中に捨てられた所がふえるまで。:13 そこにはなお、十分の一が残るが、それもまた、焼き払われる。テレビンの木や榿の木が切り倒されるときのように。しかし、その中に切り株がある。聖なるすえこそ、その切り株。」と。

つまり、私たちが私たちの愛する者たちの救いを願っていることを神は十分にご存じです。私たちが言う前から神は私たちの心をご存じです。私たちがフォーカスを当てなければいけないのは、私たちの神がどのような務めを与えてくれたかということです。神は私たちに「人を救え」と言われたわけではありません。「語れ」と言われたのです。

パウロは異邦人に遣わされた働き人です。彼は異邦人のところに出かけてすばらしい救いを語ったのです。でも、彼の心の中には自分の同胞たち、ユダヤ人たちが救いに与ることを願っていました。ローマ書の中で彼はこのように言っています。9：2、3「:2 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。:3 もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」、パウロは「もし、私の愛する同胞が救われるのなら、

私は地獄に行く。もし、私が地獄行くことによって愛する人々が救われるなら、そのようにしてください。」と言ったのです。もちろん、彼が救いを失うことはありません。でも、彼がどれほど自分の同胞を愛していたのか、そのことが分かります。モーセが祈ったのと同じように、パウロも自分の愛する民族のために、愛する人々のために祈るのです。

でも、パウロ自身が学んだことがその後に記されています。ローマ9：16「したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」と。私たちがどんなに努力をしても、どんなに願ったとしても、神のみこころが成されるのです。私たちが地上にあって何をしているのか？「私の願い事をぜひ聞いてください！」と、その思いがあるでしょう。でも、私たちは神のみこころを受け入れるのです。喜んで感謝して…。なぜなら、この方は神だからです。私たちはこの方に従うことを決心したからです。しかも、この方は常に最善のことしか為さらないのです。

だから、私たちは神のみこころを喜んで感謝して受け入れることを学び続けているのです。私たちの務めは「人を救うこと」ではありません。なぜなら、それは私たちには「できないこと」だからです。救いは神のあわれみのみわざなのです。神が為してくださる働きなのです。ですから、私たちは語ることが務めであるゆえに、託されたこの福音のメッセージを正確に、福音のメッセージのすべてを、いのちがけで語り続けるのです。これが神が私たちに望んでおられることです。

でも、先に話したように、確かに、誘惑がないわけではありません。福音に何かを加えることによって、もっと多くの人がこの救いを受け入れてくれるのではないかと思います。もし、私たちがそのことを選択するなら、まさに、このコリント教会の人たちと同じことをしていることになります。コリントの人たちは福音にこの世の知恵を加えたのです。人間的な知恵を加えたのです。ですから、パウロは前回見た17節で「…キリストの十字架がむなしくならぬために、ことばの知恵によってはならないので

す。」と言ったのです。「キリストの十字架がむなしくならぬために」とあります。これはある英語の聖書では「キリストの十字架がその力を失くしてしまわないように」と訳されています。なぜなら、「救い」は100%神のみわざだからです。私たち人間が何かをしたから人が救われるわけではありません。神がすべてのことを為されるのです。でも、私たちが人間の知恵を加えてしまうなら、このような人がきっと生まれて来るはずですが。それは「でかした！よくやった！」と自分の手柄にする人です。神だけが為されるみわざをあたかも自分がやったかのように、神だけが受けるべき栄光を私たちが横取りしてしまうのです。このようなことが決してあってはならないと、そのことが17節でパウロが教えたことです。神が託して下さった福音のメッセージに何もかも加えてはならないのです。

さて、18節はこのように続きます。「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」、最初に「十字架のことばは、」と記されています。これは17節で見た「ことばの知恵」ということばと対比していることに私たちは注意すべきです。この「ことば」は同じギリシャ語が使われています。17節でパウロは「ことばの知恵」と言って「人間の知恵で語ることば」、つまり、メッセージ、文脈では福音のメッセージのことです。18節の「ことば」は「十字架を中心に据えた福音のメッセージ」です。ですから、17節と18節でパウロは「福音を人間の知恵を用いて語るのか？」、それとも「キリストの十字架をしっかりと語るのか？」、そのどちらかだと言っているのです。

皆さんがこうして礼拝に集まる、集會に集まる、そのときに人間の話を聞きたいですか？それはもう私たちはマスコミを通していつも聞いていることです。専門家と言われる人たちがいろいろな自分の考えを話しています。私たちが聞きたいことは「神が何と言われているか？」、そのことではありませんか？教会に来てまで、前に立つ人が自分のことを話しても、それは一時的には何かの励ましになるかもしれませんが、私たちが知りたいのは「神がどう言われているか？」です。どんなメッセージを神はこの聖書の中に記して下さったのか？そのことです。なぜなら、この神のことばに祝福、希望があるからです。私たちは当然、この神のみことばを通して神のみこころを知るのですが、同時に、私たちが覚えなければいけないのは、今日、私たちはそれを見ていきますが、「神のおことばの力」です。私たちはそれを知らなければなりません。どんな力をこの聖書が持っているか？ということ。パウロはそのことを知っていました。ですから、私たちは今日、18節しか見ることができませんが、「神のみことばの力」について見ていきます。どんな力をみことばは持っているのか？そのことを知れば私たちは「このみことばだけを語ればいいのか」と確信を持ちます。

18節にはみことばへの「二つの応答」と、そして、「二つの運命」を見ることが出来ます。

## ☆みことばの力

### A. みことばへの異なる応答

「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、」とあります。「十字架のことば」とは十字架のメッセージ、「福音」のことです。それに対する応答のことです。

### 1. 「受け入れない」 : 滅びに至る人々には愚かである

人々はこの福音のメッセージを聞いたときに、ある人たちはそれを「受け入れない」という応答をします。そのことが前半に記されています。「滅びに至る人々には愚かであっても、」と。「滅びに至る」と日本語に訳されているこの動詞は現在形で書かれています。訳者は敢えて「至る」ということばを加えました。そのことによって、この箇所が言わんとする意味を明確に伝えようとしたのです。「滅びに至る」とは「滅びの道を継続して歩み続けている」人のことです。今まさにこの人たちは滅びの道を歩んでいる。そして、最終的に「永遠のさばき、永遠の滅び」が待っています。

その道を今現在歩み続けている人のことです。永遠の滅びへと続く道をまっしぐらに歩み続けているのです。なぜなら、この人たちは神が備えてくださった救いを拒んでいるからです。私たちは例外なく神のさばきを受ける者です。救ってくださる神を忘れ感謝もしないで好き勝手に生きて来た者です。当然、神の怒り、神のさばきを受けるべき者です。そんな私たちのために神は救いを備えてくださった。それが福音のメッセージです。でも、その救いのメッセージを、その救いを拒むならその人には自分の犯した罪のさばきしか残っていません。ヨハネ3：18「御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている。」、ヘブル2：3にも「私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、どうしてのがれることができます。この救いは最初主によって語られ、それを聞いた人たちが、確かなものとしてこれを私たちに示し、」、神が備えてくださった唯一の救いを拒むなら、どのようにしてさばきを逃れることができるか？自分の犯した罪に対するさばきは自分の身に降り掛かって来ます。あなたがしたことにはあなた自身がその報いを受けなければならない、なぜなら、神が備えてくださった救いを拒むからです。

でも、実際に、イエスがあなたの罪を負って十字架で死に、三日後によみがえってくださった、こうして神が完全な救いを備えてくださったと、そのことを聞いてもある人々にはそれは「愚かなこと」に思えるのです。「滅びに至る人々には愚かであっても、」と「ばかばかしい話、馬鹿げた話、ナンセンスなこと」だと思ってしまうのです。あなたも初めて福音を聞いたときにそのように思いませんか？「何を言っているのか？イエス・キリストだけが救い主だなんて何を言っているのだろうか？」と。

聖書が教えるように、永遠の滅びの道を継続して歩んでいる人々は、神の救いのメッセージ対しても、それを受け入れようとしなくて、却って、それは「愚かな話、馬鹿げた話」と思うのです。なぜ、この人々はそのように思うのか？私たちが振り返ってみるならよく分かります。

### ◎なぜ、福音のメッセージを「愚かなこと」と思うのか？

#### 1) 「自分の信条、自分の考える救い」と異なるから

「信じるだけで救われる」ということばを聞きませんか？そんな簡単に罪の赦しを得ることなど有り得ない、もっと努力をしなければならぬ、もっと善行を積み重ねなければならぬと言います。このような考えをもっている人もいます。彼らは自分の考える、自分の信じる「救い」と異なるためにそのように思うのです。そういう人々は、自分を満足させることはできても、悲しいことに、神を満足させることはできません。世の中のすべての宗教ができることは、信じている人の心を満足させることだけです。生きている間、自分は天国に行けると思い込んでいるからです。問題は、最終的な判定を下される神がどう言われるか？です。「私がそう思うか？」ではなく、さばかれる神がどう言われるか？です。

世の中の宗教は何を信じててもそこに救いはありません。それは人間が考え出したものだからです。でも、このイエス・キリストによる救い、福音のメッセージは神ご自身が成してくださったみわざです。神が救い主を送ってくださった、神が救い主をあなたの身代わりに十字架につけてくださった、神が救い主をあなたの代わりにさばいてくださった、神が救い主をその死からよみがえらせてくださった、神があなたのために救いを備えてくださった、その救いをあなたが拒む以上、ここに記されているように、あなたはまさに今、永遠の滅びに向かって継続して歩み続けているのです。

「あざ笑った」ということがあります。確かに、そのようなことがあったのです。今見ているコリント人への手紙と関連しているので、使徒の働き17章に記されていること、パウロがアテネの町を訪問した時の様子を見てみましょう。パウロは、そこで実際にそのような反応をした人たちのことを記しています。パウロはアレオパゴスの丘でメッセージをします。使徒17：29-33「:29 そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。:30 神は、そのような無知の時代を見過しておられました。今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。:31 なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」:32 死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たち

は、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」と言った。:33 こうして、パウロは彼らの中から出て行った。」、

実際に、このようなことがアテネの町であったのです。では、「あざ笑った」人とはだれだったのでしょうか？「またいつか聞くことにしよう」と言ったのはだれだったのか？

この前の記事を見ると、聴衆がだれであったのかが分かります。同じ17章の17-21節を見てください。「:17 そこでパウロは、会堂ではユダヤ人や神を敬う人たちと論じ、広場では毎日そこに居合わせた人たちと論じた。:18 エピクロス派とストア派の哲学者たちも幾人かいて、パウロと論じ合っていたが、その中のある者たちは、「このおしゃべりは、何を言うつもりなのか」と言い、ほかの者たちは、「彼は外国の神々を伝えているらしい」と言った。パウロがイエスと復活とを宣べ伝えたからである。:19 そこで彼らは、パウロをアレオパゴスに連れて行ってこう言った。「あなたの語っているその新しい教えがどんなものであるか、知らせていただけませんか。:20 私たちにとっては珍しいことを聞かせてくださるので、それがいったいどんなものか、私たちは知りたいのです。」:21 アテネ人も、そこに住む外国人もみな、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。」、ですから、このときの聴衆がどんな人たちだったのかが分かります。「エピクロス派とストア派の哲学者たち」とあるように「哲学者たち」でした。

彼らはどんなことを信じていたのか？簡単に言います。

**エピクロス派**：このグループのある人たちは神々の存在を信じません。ゆえに、彼らは死後のさばきや地獄などの存在も信じません。また、別のグループは神々の存在を信じてはいるけれど、それはこの世からかけ離れた存在なので、この世界には何の影響も与えることはないと考えていました。このような考え方を持っている哲学者たちがエピクロス派です。ですから、当然、パウロの言うことを聞いたら「何を言っているのか？」と思うでしょう。なぜなら、パウロが語ったのは「罪、さばき、永遠の地獄」のことだからです。

**ストア派**：汎神論を信じている人たちです。つまり、すべてのものに神が宿っているという考えです。このような考えを持っている人たちからすれば、神はお一人だということを知ったら当然「この人はいったい何を語っているのか？」と思うでしょう。自分たちが信じていることと異なることを語っていると。そこで彼らはパウロのメッセージを聞いて「あざ笑う」のです。

ですから、自分の信じていることと違う話を聞くと、それに対して「愚かなこと、ナンセンス」と捉えるのです。

## 2) 信じたくないから

もう一つの理由は「信じたくないから」です。

・ユダヤの総督のペリクス＝彼は「数日後、ペリクスはユダヤ人である妻ドルシラを連れて来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスを信じる信仰について話を聞いた。」（使徒24：24）とパウロに出会います。これだけを聞くと「すばらしい！彼は信仰に至ったのか？」と思いますが、このように書かれています。24：25「しかし、パウロが正義と節制とやがて来る審判とを論じたので、ペリクスは恐れを感じ、「今は帰ってよい。おりを見て、また呼び出そう」と言った。」と。結局、彼は信じる事がなかったのです。イエスを信じる信仰について話を聞きたいと言いながら、その話を聞くと信じないのです。「また今度聞くことにしよう。今はもう帰ってよい。」と言います。結局、信じたくない者は信じないのです。

・アグリッパ王＝使徒の働き12：1に書かれているのがアグリッパI世でクリスチャンを迫害しました。その息子のアグリッパII世のことです。パウロはこのアグリッパII世の前に立って弁明をするのです。そのことは使徒の働き26章に書かれています。このアグリッパ王についてパウロは「ユダヤ人の慣習や問題に精通している」と語っています（使徒26：3）。パウロの弁明、すなわち、パウロの証、福音宣教のメッセージですが、それを聞いたとき彼は「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている」と言った。」（使徒26：28）と。結局、彼も福音を受け入れようとはしなかったのです。ですから、どんなに知識をもっている、どんなに関心をもっている「信じたくない」者は「信じない」のです。

今日のテキスト、Iコリント1：18にあるように「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、」とまさにこの通りです。自分が信じていることと違うことであるなら信じようとしなさい、自分が信じたくないことであればそれを信じないのです。そうして彼らは、救いのチャンスがあるにも関わらず、永遠の滅びの道を継続して歩み続けるのです。これが福音を聞いたときにある人たちが取る応答です。

## 2. 「受け入れる」： 救いを受ける私たちに、神の力である

では、別の人たちはどうでしょう。18節に「救いを受ける私たちに、」とあります。ある人たちは「受け入れる」のです。ですから、メッセージを「拒む者たち」と「受け入れる者たち」、この2種類

の人たちが存在するということです。この「救いを受ける」は先ほど見た「滅びに至る」と同じように動詞は現在形を使っています。ですから、明らかにこの二つは対比されているのです。人間には2種類の人がある、永遠の滅びに向かって歩み続けている人と、永遠の救いをいただいて歩み続けている人と、この2種類が存在するとパウロは言うのです。

面白いことは、この「救いを受ける」と訳されていることばは受動態で書かれていることです。救いは神の恵みによって私たちに与えられるものだからです。私たち自身の功績ではないということです。パウロはここで「救いを受ける」と言いましたが、「救いに至る」と訳してもいいことばです。その訳のほうがよく分かったかもしれません。片方は「さばきに至る」、もう片方は「救いに至る」です。

「救いに至る」の方がより明確だと思うのは、まさに、私たちは救いの道を歩んでいて、最終的に「救い」を得るからです。義とされた者、罪の赦しをいただいた者たちはその救いが完成する日を待っているからです。この罪のからだを変えられて栄光のからだをいただいたときに救いは完成するのです。ですから、「救いに至る」、そのような歩みを日々歩んでいるのです。そのように見る方が「救いを受ける」ことの意味がより明確だったかもしれません。でも、言いたいことははっきりしています。人間はどちらかに属する、救いを拒んでいるのか救いを受け入れるのか…と。

そして、パウロはこう言います。18節「救いを受ける私たちには、神の力です。」、救われている者には福音は「神の力である」と。なぜ、このような表現を使ったのか？この後でも使いますが、パウロが言いたいことは、この福音には他のいかなるものも絶対にもたらすことのできない「救い、罪の赦し」をもたらすことができる、その力があるということです。私たちはその証人です。私たちの目を開いてくださったのはだれなのか？私たちを救いへと導いてくださったのはだれなのか？使徒26：18でパウロはこのように言います。「それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。』」と、これを為すことができるのは神です。

なぜ、イエスが肉体をもってこの世にお見えになったのか？へブル2：14、15「14そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、15一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」、かつて、私たちは死を恐れていました。死んでから先のことは分からないからです。でも、今、私たち信仰者はそれを恐れていません。なぜなら、私たちが死を迎えたときに何が私たちを待っているかを知っているからです。私たちはこのすばらしい神にお会いして、この方とともに永遠を過ごすからです。

この救いをいただいた私たち、この救いは100%神のみわざです。確かに、この救いには、十字架のことばにはこんな力があります。私たちを新しく生まれ変わらせる力、罪から解放させる力、滅びから解放させる力です。それを私たちは実際に経験したのです。

## B. 異なる運命

二つの応答があるだけでなく二つの運命があることがここに記されていると言いました。先ほどから話しているように、人間が永遠を過ごすのはそのどちらかです。

- ・救いを受け入れる者：「救いを受ける」、永遠のいのちをいただきます。
  - ・救いのメッセージを受け入れない者：「滅びに至る」、つまり、永遠のさばきに至るのです。
- 救いはみことばを通して成される神のみわざです。

さて、まとめるとこういうことになります。パウロが私たちに言うことは、私たちに必要なことは「神のみことばの力を知ること」です。神がみことばを通して為すみわざに私たちの助けは全く必要としないのです。たとえ、私たちが人間的な知恵をもって語ればもっと救われる人が起こされるのではないかと、そのような誘惑に駆られるかもしれませんが、それは真実ではありません。誤りです。私たちが覚えるべきことは「神のことばには力がある、罪人を救い出すことが出来る」ということです。

## ◎異邦人の救い

・カイザリヤで：憶えていますか？最初の異邦人が救いに与ったこと。コルネリオという人物が救われています。彼はカイザリヤにいました。地中海に面したところ。神の導きによって、ヨッパにいるペテロを自分のところに連れて来るようにと願い出るので。ペテロがやって来ます。そして、ペテロが神のことばを話すのですが、このように記されています。使徒の働き10：44「ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。」と。

ペテロは神のことばを正確に語りました。それを聞いている人々に聖霊が下ったのです。つまり、彼らが救いに与ったということです。ペテロが何か特別なことをしたわけではありません。彼はみことばを正しく語ったのです。そして、それを聞いている人たちにこのような救いが成されたのです。

・ピリピで : パウロはピリピの町を訪れます。ヨーロッパ伝道が始まります。このピリピの町で一人の女性が救いに与ります。「ルデヤ」と言います。彼女はテアテラ市の出身です。テアテラは今のトルコです。彼女は紫布の商人でした。非常に高価な布を売り歩いていたのです。彼女は「神を敬う」人物だったと使徒16:14に記されています。「テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、…」と、この「神を敬う」ということばは「礼拝する」という意味です。そして、この表現は異邦人に用いることばです。ですから、このルデヤは異邦人であったことが分かります。「…主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。」と、主が彼女の心に働かれたので彼女は心を開き救いに与ったのです。どうして彼女は救いに与ったのか？「パウロの語る事に心を留め」だからです。

みことばにはこのような力があるのです。私たちの語る人間的なことばにはこのような力はありません。私たちができることは人にある種の感銘・感動を与えることです。でも、私たちのことばは人に救いをもたらしません。その力をもっているのは神のことばだけです。ですから、「福音宣教」に召された私たちは、結果に左右されることなく、神の救いのメッセージを混ぜ物をしないで語り続けることです。神のメッセージを正確に伝えていくことです。そのときに、私たちは神のみわざを期待することが出来ます。ローマ10:17には「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」と書かれています。キリストのメッセージを語る時に神のみわざが為されるのです。それが私たちに託された務めであることを私たちは忘れてはいけません。

私たちの愛する者たちが救われてほしいということはもう強くあります。そして、彼らが救われるためなら、パウロでもモーセでもないけれど、同じ思いを持っています。自分が滅んだとしても愛する者たちが救いに与るなら…と、そんな思いはもう神はご存じです。その上で、神が私たちに託された務め、それは「神のことばを語る」ことです。十字架のメッセージを私たちは語り続けていくのです。

そして、私たちは主がどんなみわざを為さるのか？期待しましょう。なぜなら、私たちがこのメッセージを語る時に、神はご自分のみわざを成してくださるからです。ですから、もし、福音宣教に疲れを覚えているなら、失望を抱いているなら、みことばに立つことです、皆さん。神があなたに何を命じたのか？この働きを主の助けをいただきながら忠実にやり続けることです。そのようにして私たちは生きるのです。